

## グリーディリザード (greedy lizard)

欲深いトカゲと称されるこの生き物は、体長5メートルの巨大な捕食獣（イーター）。見た目は巨大なトカゲだが4本の足は胴体から真下に直立しており俊敏に動くことができる。

透明化能力を持ち、気付かれることなく獲物に忍び寄る。そして尻や股間に喰らいつき、そのひと咬みで腰骨を砕き逃げられないようにしてから丸呑みにしてしまうモンスターである。



### 【第1話】

少女は焦っていた。次は体育の授業でプールに移動だというのに、休み時間トイレで用を足していたら眠くなってしまい、便座に座ったままうたた寝をしてしまった。ほんの数分ではあるが、気づいたらもう授業は始まっている時間である。

急いで教室に戻るも誰もいない。皆スクール水着に着替えてプールに行ってしまった後である。慌てて制服を脱ぎ始める少女。少女は高校3年生。世にいうJKというやつだ。ややスリムではあるものの、バストとヒップは大きめで、それでいて童顔な女の子である。

この少女しかいないはずの教室に、じつはもう一人、いやもう一体生き物が侵入してきたことに彼女は気づいていない。静かに獲物へと忍び寄るこの生き物は透明化する能力を持っていた。美味そうなお馳走の匂いに誘われてやってきた捕食獣（イーター）である。

少女がブラジャーを外すと、大きめの乳房が露わになりメスの匂いが漂った。そしてショーツを脱ぐと、これまた大きめの尻と股間からメスの汗と尿の匂いが外気に放たれる。

捕食者の敏感な嗅覚はそれを捉え、食欲とともに猛烈な狩猟本能が駆け上った。

次の瞬間、イーターはもの凄い勢いで少女の尻に喰らい付いた！

「ひゃっ」

悲鳴ともいえない悲鳴が漏れる。と同時に腰骨が碎かれる音。激痛とともに少女は言葉を失い、空中に浮かびながら尻を突き出した格好で動けなくなる。そして透明だった捕食者は姿を現す。

そこには、体長5メートル、巨大なトカゲのようなモンスターがその大きな口で少女の尻に喰らい付いていた。グリーディリザードである。透明化する能力を持つイーターであり、若い雌の肉が大好物。

少女は何が起こったか理解できず、激痛にもだえ恐怖に震える。一方のイーターは啜えた獲物の肉体から顎に伝わる噛み応えに狂喜していた。口の中にびっしり生えた鋭く尖った硬い歯が、少女の柔らかい尻肉に食い込んでいる。

イーターの強靱な顎は、美味そうな裸のJKの尻をさらに  
圧迫する。「バキッ」という音とともに、少女の腰骨はさら  
に砕けた。

「あっ・・・っ・・・っ」

悲鳴というより、圧迫されたことで漏れ出た小さな声。も  
う逃げることもできないであろう。少女は涙と鼻水を流  
しながら嗚咽をはじめ。もはやただの肉塊となった裸の  
JKは、喰われるだけの餌と化した。

イーターはこの雌肉を尻から丸呑みにしていく。じよじよ  
に喉の奥へと呑みこまれていく身体は強制的に開脚させら  
れ、大顎が噛み直すたびに大きめの乳房はプルンプルンと  
揺れる。尻を突き出した形で呑み込まれていくにつれ開脚  
した両足が身体と並行に、一本の棒状になって喉の奥へと  
ギュ〜ッと押し込まれていく。

まだ意識がある少女は恐怖にひきつった顔で涙と鼻水とヨ  
ダレを垂れ流しながら嗚咽を繰り返す。途中でその大きな  
乳房がひっかかるも、イーターはさらに大きく口を開け、

乳房も口の中へと収め、喉の奥、食道へと送り込む。少女の怯えた顔も口の中へ。そして喉の奥へ隠れると、ゴクンと丸呑みにしてしまった。

胃の中に送り込まれた生きた雌肉は強酸性の胃液にまみれながら、胃の蠕動（ぜんどう）運動で急速に消化されていく。まもなく餌は意識を失い、こときれる。大きな胸と尻はさぞかし栄養があることだろう。

栄養豊富な餌を平らげ満足げなイーター。30分もしないうちに消化吸収され、イーターの血肉へと変わっていく。だが体長5メートルもあるこのサイズのイーターは、満腹とは言いがたかった。次の獲物を捕らえんと再びその姿を透明化する。

イーターの嗅覚はすでに次の獲物の匂いを嗅ぎとっていた。イーターは教室を後にし、プールへと向かう。そこにはスク水を着たJKたちが20匹以上おり、炎天下のなか気持ちよさそうに泳いでいた。

チャイムが鳴り体育の授業が終わると同時に一斉に片側のプールサイドから上がっていく少女たち。その反対側のプールサイドから静かに近づいていく捕食者。バシャバシャと水音が続くなか、プールに大きな生き物が入った音には誰も気づかなかった。

水中に潜り込んだイーターはプールサイドへ向かう獲物の群れを追いかける。その最後尾にいた少女は先ほど食べたJKより背が高く、肉付きも良かった。猛スピードで迫ったかと思うと少女の足に喰らい付き、一瞬で水中へと引きずりこむ。

プールサイドに上がった少女たちは、誰も最後尾にいた一人が消えたことに気づかなかった。笑いながら楽しそうにおしゃべりをしつつ教室へと戻っていく。

一方、水中に引きずりこまれた少女は水を急激に肺に入れてしまい失神してしまった。そして姿を現したイーターは弛緩しきった獲物の身体を噛み直し、水着を前足の鋭い爪で破り捨てた。食べるのに邪魔だった布はなくなり、裸になった雌肉の塊。

一旦獲物を放すと、今度は少女の股間に喰らいつく。「バキッ」という音とともに少女の腰骨は碎かれるも、すでに意識のない裸の雌肉は目と口を半開きにしながら仰向けの状態で水中をゆらゆら揺れている。

少女の無毛の陰部を啜っていたイーターは、先ほどと同じようにじょじょに呑み込んでいく。呑み込んでいくにつれ、少女の身体は開脚する形になっていく。そしてまたも大きな乳房が口に引っかかるも、さらに大きく口を開け呑み込んでいく。肉塊はその動きに抗うことなく喉の奥へと送り込まれていき、そしてゴクンと丸呑みにした。

すぐに始まる消化吸収。満腹になったイーターは満足げにプールから上がり、この場から静かに去っていく。水中には破れたスクール水着だけが残され漂っていた。

次の日もイーターは腹を空かせてやって来た。昨日食べた2匹のJKが美味かったので味をしめたのである。とはい

え目立ってしまったってのは不利だということも野生の勘で気づいていた。自分の存在に気づかれでもしたら警戒され対策をとられてしまうであろう。

なるべく見つからぬよう獲物に近づき、捕食せねばならない。そして少なくとも1日2匹は食べたいところである。

幸いこの女子校は人里離れた山中に孤立していた。学校の周りは深い森となっていて歩いて近隣の町まで移動するのは不可能な距離。

過疎化が進むこの地では学校の他に人のいる建造物は、校舎に隣接する女子寮のみ。

この女子生徒たちはみなその寮で寝泊まりしており、例えるならすぐには逃げられない環境であった。さらには電波は届かず、加えて電話回線の故障により今は外部とのコンタクトは難しい状況。完全に陸の孤島状態である。

またこの女子校の先生もまた若い女性のみで構成されており、6人。生徒は40人。事務員などその他の職員も若い女性のみで4人おり、計50人。そのうち昨日2人食べたので残るは48人。



イーターにとってはすべてご馳走であり、全員を胃の中に送り込むつもりでいる。すでに人間側にとってはサバイバルが始まっていたのである。何人生き残ることができるであろうか？イーターからすれば何匹喰うことができるであろうか？

なお、人数の表記は人間側からは「人」  
イーター側からは「匹」と表記する。

**【残るご馳走】**

J K 38匹

J T 6匹

J J 4匹

J K=女子高生

J T=女性教師

J J=女性事務員（その他職員含む）



## 【第2話】

暑い日差しの下、ブルマと体操服姿のJKたちがランニングをしている。夏である。体育の授業である。自然環境を活かして学校の周りにはランニングコースが設けられていた。4 km あるこのランニングコースは部分的に森の中にまで伸びており、道のすぐ横は木々がうっそうと茂っている場所であった。

その木々の中にイーターは潜んでいた。目を凝らしても見つけるのは困難な木々のなか、さらに透明化していたのでまずバレることはない。集団で走ってくるJKの集団があった。彼女たちの息づかいが聞こえてくる。

が、イーターはあえてこれらをスルーした。もしこの集団を襲って1匹でも逃げられればその後不利になる可能性がある。

瞬く間にこの全員を動けなくすることも不可能ではないかも知れないが、その確証もない。獲物の匂いに食欲を掻き立てられつつもイーターはじっとして動かなかった。その間にご馳走たちは雌の匂いを振りまきながら走り去っていく。

そのすぐ後にゼイゼイ息をしながらノロノロと走ってくる1匹のJKが近づいてきた。さっそくチャンスである。体力がないのであろうか、すでに疲労困憊していて簡単に捕まえられそう。ややぽっちゃりしていて、いかにも体力がなさそうな雌肉の塊。

昨日食べた2匹のJKより、もっと大きな乳房と尻肉を揺らしているが、ウェストはそこまで太くもなくグラマーといった体型。本当に美味そうなお馳走である。この雌肉が目の前まできた瞬間、イーターは跳びかかり大顎で太ももに喰らいつく。グラマー少女は

「ふえっ」

というかすかな声とともに倒れ込む。足の骨が折れる音とともに、透明化を解除し姿を見せたイーターの無数の鋭い歯が太ももに突き刺さっていた。少女はもう逃げられない。ただでさえ疲労困憊していた上、さらに片足が折れてしまったのだ。

「い、いた、痛い、」

イーターはただの肉塊となった獲物を啜えたまま、すぐさま森の中へと入っていった。他の雌たちに見つかる前に見えないところまで隠れるつもりなのだ。走りながら、啜えた少女の太ももの柔らかい肉感を感じたのも狂喜する。少女はその振動に激痛がはしる。

「あ、いや、痛い、」

そして誰にも見つからないであろう場所まで来たところで、食べやすいように獲物がつけている布を鋭い爪で切り裂き破り捨てていく。体操服を破り捨て、ブルマを破り捨てると、下着姿となった雌肉が悲鳴を上げる。が、ここからでは誰の耳にも届かない。構わずブラジャーとショーツも破り

捨てると、ムチムチとしたよく脂ののった裸体が露わとなる。

イーターは今度は露わになった裸のJKの尻に喰らいつく。痛みと恐怖に泣き叫ぶ少女だが、そんなことおかまいなしにさらに顎に力を込める。バキバキバキバキッと音を立て、少女の腰骨は碎ける。

少女の柔らかい尻肉の弾力はとても心地良く、無数の歯が突き刺さり食い込んでいく。少女は失禁し、イーターの口の中に尿があふれ垂れ流される。その尿もまた塩味がきいていて美味しい。

噛みついた顎をいったん尻から放すと、アナルを舐め始める。その味はイーターの味覚を満足させる美味さだった。少女は怯え泣いているが、何の抵抗もできない。腰骨を碎かれているので逃げることはもちろん、立つこともできない。イーターは舌先をアナルに突っ込む。直腸の中を舐めまわし舌先でしばらく味わうと、今度は陰部を舐めまわす。

しばらく陰部を味わうと、まとも口を大きく開けデカ尻に喰らいつく。そして呑み込もうとするも、あまりに尻がで

かくてすぐには喉まで入っていかない。さらに大きく口を開けモグモグと喰らっていくと、じょじょに獲物の身体は尻から呑み込まれていく。それにともない強制的に開脚させられていく。

その捕食運動により獲物の大きな乳房がプルンプルンと揺れる。開脚した太ももはやがて胴体に密着させられ一本の棒状となり、イーターの喉の奥へと強引に押し込まれていく。

そして大きな乳房が口に引っかかる。が、構わず呑み込んでいく。おっぱいは口の中でぎゅ〜っと潰されていき、食道へと運ばれていく。そしてゴクンと丸呑みにしてしまった。

胃の中へと運ばれた J K の肉体は強酸性の胃液にまみれ蠕動（ぜんどう）運動で揉みほぐされていく。しばらくは息があったが間もなくこときれ、消化吸収されていく。大きな尻も乳房も分解されイーターの栄養へと替わっていく。

ご馳走を平らげたイーター。ボリュームのある獲物ではあったものの、やはり 1 匹だけでは空腹が収まらない。次の

獲物にありつこうと先ほどの場所へと戻っていく。